

Contents *****

特集：2014年ワールドカップから見る国際情勢	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
”Beautiful game, dirty business” 「サッカーは麗し、ビジネスは穢し」	7p
<From the Editor> いよいよ開幕	8p

特集：2014年ワールドカップから見る国際情勢

ちょうど今朝から、2014 FIFA ワールドカップ・ブラジル大会（こう書くのが正式なのだそうです。以下は「W杯」と略させていただきます）が始まりました。普段はそれほどサッカー熱が高いわけではない筆者も、ついワクワクしてしまう季節の始まりです。¹

W杯は、その時どきの国際情勢を映し出す鏡のようなところがあります。今年のブラジル大会からも、政治や経済のいろんな断面を読み取ることができると思います。本号が今大会をさらに深く楽しむ一つの材料となれば幸いです。

●FIFAを揺るがす「カタールの醜聞」

今週のThe Economist誌（6月7日号）がいきなりぶっ飛んでいる。さすがに英国の雑誌だけあって、オリンピック以上にW杯に対して愛情が深いのである²。カバーストーリーの抄訳は本号のP7～8をご覧ください。と、日本のメディアがあまり取り上げていない「カタールの醜聞」に対する非難の強さには少々驚かされる。

Why on earth did anyone think holding the World Cup in the middle of the Arabian summer was a good idea?

（そもそもどこの誰が、真夏のアラブでW杯を開催するのが良いなどと考えたのだ？）

¹ 過去の本誌でも、「ワールドカップの経済学」（2002年5月31日号）、「ワールドカップとサミットから見た日本経済」（2010年6月15日号）など取り上げている。2006年は、不甲斐ない成績に終わったためか取り上げていない。今年のザック・ジャパンにも是非、決勝トーナメント進出を果たしてほしい。

² 本来であれば、競技名も英語である「フットボール」（or 蹴球）という言葉を使うべきなのかもしれないが、本稿では日本人が慣れ親しんできた米語の「サッカー」を使うこととしたい。

説明しよう。W 杯の開催地は、2018 年のロシア、2022 年のカタールと 3 大会先まで決まっている。2022 年のカタール開催については、以前から「W 杯開催時期の 6~7 月に、気温が 40 度を超える場所でサッカーができるのか?」との疑問が寄せられていた。

いちおう、スタジアムには強力な冷房装置を完備することになっているのだが、その後、FIFA 内では「冬季開催」を模索する動きもあった。やはり不自然な決定であったことは否めない。そもそも 1 度も W 杯に出場したことのない国が、なぜ「日本、米国、韓国、豪州」という強力なライバル 4 か国を破って、開催権を得ることができたのか?

今月 1 日になって、英サンデータイムズ紙が「カタールのモハメド・ビン・ハムム理事(当時)が、他の FIFA 幹部に対して 500 万ドルの秘密資金を流していた」ことを報じている。しかもこのハムム理事、2012 年に汚職でサッカー界を永久追放になっている。昔の五輪招致活動においては、IOC 委員への接待攻勢が行われていたそうだが、おそらく FIFA では今でも同様なことがまかり通っているのであろう。

ブラジル大会の開幕直前になって飛び出したこのスキャンダルにより、世にも珍しい「開催地の選び直し」に至るかもしれない。The Economist 誌は、スイス政府に対して FIFA に圧力をかけよと迫っているが、その前にスポンサー各社の意向が働きそうである。ソニーなど FIFA パートナー 6 社(ただしエミレーツ航空を除く)は、かかる不明朗な大会に出資していることを、株主にどう説明するかという問題が生じてしまうのだ。

カタールは秋田県くらいの面積に 200 万人が住む小国だが、オイルマネーのお蔭で「一人当たり GDP が約 10 万ドル」という超お金持ち国でもある。わが国は年間 300 億ドル以上の LNG や石油を輸入しているし、東日本大震災の際には 1 億ドルの支援を受けた恩義もある³。あまり意地悪を言いたくはないのだが、これは同国として「W 杯開催返上」を言い出す好機であるかもしれない。

というのも、今後はシェールガスの登場によって、天然ガス価格は下落すると予測されている。先月の中ロ首脳会談では、ロシア産天然ガスの中国向け長期供給契約が決まったが、プーチン大統領の足元を見た習近平国家主席が思い切り値切り倒したので、アジアでもガス価格の先安感が強まっている。となれば、W 杯開催は重荷になるかもしれないのだ。

2022 年 W 杯開催の権利が宙に浮いた場合、最短距離にいるのは米国ということになるだろう。米国ではサッカーは今も、アメフト、野球、バスケット、アイスホッケーという 4 大スポーツの後塵を拝している。ゆえに 1994 年以來の米国開催を認めることが、サッカーの繁栄にとっては合理的な選択となるからである。

もちろん競技施設の充実度などから考えて、日本もまた「有資格」であることは言うまでもない。東京五輪の 2 年後となるので、外国人観光客への対応体制も十分に整っているはずである。頭の隅に入れておきたいシナリオである。

³ この資金によってカタールフレンド基金が作られ、子供の教育、健康、水産業の 3 分野に資金提供が行われている(国際開発センターによる「海外からの支援実績のレビュー調査」から)。

●浮かび上がる「2010年の誤解」

上記のような「取らぬ狸の皮算用」はさておいて、「2018年ロシア、2022年カタール」という開催地はともに2010年に決められている。2010年と言えば、リーマン・ショックからまだ日が浅く、先進国経済が低迷していた頃である。特に欧州経済は、ギリシャなどの債務危機問題で大揺れとなっていた。G8がG20に取って代わられたり、日本経済がGDPで中国に抜かれたり、先進国が自信喪失気味となっていた年である。

逆にBRICsなどの新興国経済が好調だった。中国とインドはこの年、10%成長を達成する。資源と農産物価格の上昇により、ロシアやブラジルの経済も好調だった。南アではアフリカ大陸で初のW杯が開催され、「新興国の時代」到来を象徴するかのようであった。

この辺の力関係は、FIFA スポンサー企業の変遷を見るとよくわかる。それまで先進国中心であった構造が崩れ、新興国企業がシェアを伸ばした。特に日本企業は一気に数を減らしてしまい、「ジャパン・ブランド」の凋落ぶりが目に付くこととなった。

○FIFA スポンサーの変遷

2014 ブラジル	2010 南アフリカ	2006 ドイツ	2002 日韓	1998 フランス
<パートナー>	<パートナー>	アディダス(独:スポーツ)	アディダス(独:スポーツ)	アディダス(独:スポーツ)
アディダス(独:スポーツ)	アディダス(独:スポーツ)	バドワイザー(米:ビール)	バドワイザー(米:ビール)	ブラウン(独:電機)
コカコーラ(米:飲料)	コカコーラ(米:飲料)	アバシア(米:IP電話)	アバシア(米:IP電話)	コカ・コーラ(米:飲料)
エミレーツ航空(UAE:航空)	エミレーツ航空(UAE:航空)	コカ・コーラ(米:飲料)	コカ・コーラ(米:飲料)	キヤノン(日本:電機)
現代自動車(韓:自動車)	現代自動車(韓:自動車)	コンチネンタル(独:タイヤ)	東芝(日本:電機)	ジレット(米:剃刀)
ソニー(日本:電機)	ソニー(日本:電機)	ドイツテレコム(独:通信)	ジレット(米:剃刀)	日本ビクター(日本:電機)
VISA(米:金融)	VISA(米:金融)	エミレーツ航空(UAE:航空)	日本電信電話(日本:通信)	富士フイルム(日本:写真)
		富士フイルム(日本:写真)	日本ビクター(日本:電機)	オベル(独:自動車)
<スポンサー>	<スポンサー>	ジレット(米:剃刀)	富士フイルム(日本:写真)	マスターカード(米:金融)
バドワイザー(米:ビール)	バドワイザー(米:ビール)	現代自動車(韓:自動車)	現代自動車(韓:自動車)	マクドナルド(米:食品)
カストロール(英:石油)	カストロール(英:石油)	マスターカード(米:金融)	マスターカード(米:金融)	フィリップス(蘭:電機)
コンチネンタル(独:タイヤ)	コンチネンタル(独:タイヤ)	マクドナルド(米:食品)	マクドナルド(米:食品)	スニッカーズ(英:食品)
マクドナルド(米:食品)	マクドナルド(米:食品)	フィリップス(蘭:電機)	フィリップス(蘭:電機)	
ジョンソン&ジョンソン(米:化学)	MTNグループ(南ア:通信)	東芝(日本:電機)	Yahoo!(米:インターネット)	
モイパーク(英:食品)	マヒンドラ・サティアム(印:IT)	Yahoo!(米:インターネット)		
オイ(ブラジル:通信)	サエラ(ブラジル:食品)			
英利ソーラー(中:発電)	英利ソーラー(中:発電)			
アメリカ	アメリカ	アメリカ	アメリカ	アメリカ
5	4	7	7	4
ドイツ	ドイツ	ドイツ	日本	日本
2	2	3	4	3
イギリス	日本	日本	ドイツ	ドイツ
2	1	2	1	3
日本	イギリス	オランダ	オランダ	オランダ
1	1	1	1	1
韓国	韓国	韓国	韓国	イギリス
1	1	1	1	1
UAE	UAE	UAE		
1	1	1		
インド	インド			
1	1			
中国	中国			
1	1			
ブラジル	ブラジル			
1	1			
南ア	南ア			
1	1			
合計	合計	合計	合計	合計
14	14	15	14	12

このようなムードが、国際的なスポーツイベントの誘致活動に影響したことは想像に難くない。以下のように、ほとんどの予定が新興国に行ってしまったのである。

2014年	ソチ冬季五輪(ロシア)	W杯・ブラジル大会
2016年	リオ五輪(ブラジル)	
2018年	大邱冬季五輪(韓国)	W杯・ロシア大会
2020年	東京五輪(日本)	
2022年	??冬季五輪(*2015年に決定)	W杯・カタール大会?

しかし後から考えてみれば、2010年頃の新興国経済の活況は、米国の量的緩和政策(QE2)によって先進国マネーが大量に流れ込んだことによる「追い風参考記録」のようなところがあった。BRICSの5か国を見ても、その後の成長率は歴然と低下している。

○BRICSの経済成長率 (IMF “World Economic Outlook”から)

Country	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
Brazil	-0.3	7.5	2.7	1.0	2.3	1.8	2.7
China	9.2	10.4	9.3	7.7	7.7	7.5	7.3
India	8.5	10.3	6.6	4.7	4.4	5.4	6.4
Russia	-7.8	4.5	4.3	3.4	1.3	1.3	2.3
South Africa	-1.5	3.1	3.6	2.5	1.9	2.3	2.7

(*実質GDP、ドル建て、前年比。シャドー部分はIMFによる予想)

特に筆者が思い起こすのは、本誌では何度も紹介済みの『ブレイクアウト・ネーションズ』(ルチル・シャルマ/早川書房)冒頭のエピソードである。

2010年末、インドのデリーではセレブたちの集まりが行われていた。「黒いベントレーや赤いポルシェ」が列をなし、食卓に「神戸ビーフとイタリア製トリュフとアゼルバイジャンのキャビア」が並んでいた。

その場に招待されたシャルマは、20代と思いきインド人大富豪の息子に、自分はニューヨークから来た投資銀行家だと告げたところ、相手は即座にこう言い放った。

「ここ以外のどこに金が行くって言うんですか」

その夜、シャルマは秘かに確信を抱く。新興国なら何でも良いという時代は終わりを告げた。引き続き高度成長を持続することができるのは、ごく一握りの「ブレイクアウト・ネーションズ」だけ、という結論にたどり着くのである。

2013年末には米連銀はテーパリングに踏み切り、いよいよ量的緩和政策の終焉が視野に入ってきた。先進国のイーザーマネーに頼る経済成長はもはや不可能となった。つくづく**2010年こそは、「新興国バブル」の頂点だった**と思うのである。

●「先進国の逆襲」と「新興国の議」

昨年ぐらいから、むしろ先進国経済の復調が目立ち始めた。米国経済は3%成長の軌道に乗り、欧州経済はマイナス成長からプラスに戻った。日本もまた震災を乗り越え、デフレからも脱却しつつある。世界経済の牽引役は再び先進国に戻りつつある。

スポーツイベントの開催においても、昨年9月のブエノスアイレスのIOC総会では2020年の夏季五輪開催地が東京に決まった。決選投票ではトルコのイスタンブールを破っているので、これも「先進国の逆襲」の象徴的事例と言えるかもしれない。

実際のところ、五輪大会は先進国と新興国が代わる代わる開催するくらいがちょうど良いのではないかと思う。中国は、2008年の北京大会において自国の発展ぶりを世界にアピールした。英国は、2012年のロンドン大会において純粋なスポーツの祭典を催すことで、いかにも英国的なソフトパワーを発揮した。2020年の東京が目指すべきは、後者であることは言うまでもないだろう。

逆に今年2月に行われたソチ冬季五輪は、「スポーツの政治利用」を意図して失敗したケースではないかと思う。本誌2月7日号「新興国の不安とソチ五輪後のロシア」でも指摘した通り、ロシアはソチに500億ドルという史上最高の予算を投じたが、そのうちかなりの部分が闇に流れたと目されている。少なくとも北京大会にかかった430億ドルに比べると、費用対効果にはやや問題があったと言わざるを得ないだろう。

幸いなことに、ソチ五輪大会そのものは成功であった。ところがその閉会式当日に、ウクライナの親口政権が瓦解してしまう。その直後の、やたらと手回しの良い親EU政権の誕生は、プーチン大統領の目は「西側による悪辣な陰謀」と映っていることだろう。

そこでロシア側は、抜く手も見せずにクリミアを併合してしまった。逆に欧米諸国は、ソチG8サミットをボイコットし、ロシアを「出入り禁止」扱いにしてしまう。どちらが「得」をしたかは微妙なところだが、「ソチ五輪→ソチG8会合」という思惑が外れたという点ではロシア側の負けということになるだろう。

あらためて下記のように、「先進国と新興国」を「イノチとおカネ」で複眼的に整理してみると、スポーツイベントをめぐる認識も対比をなしているように見える。

○2014年、国際情勢とスポーツ

	外交・安全保障 (イノチ)	経済・金融 (おカネ)
先進国 Developed Countries	Democratic Peace 国際秩序を維持 →G8からロシアを締め出し →ブリュッセルでG7を開催するも、各国の思惑はバラバラ？	G7、OECD → <u>スポーツイベントは、各国がソフトパワーを競う場所</u> (国内向けの景気対策という面も)
新興国 Emerging Countries	Real Politique 既存の秩序に異議申立て →ロシアはクリミアを併合 →上海CICA会議に参加し中ロ連携を示すが、同床異夢の気配も？	G20、BRICS会議 → <u>スポーツイベントは、対外的な国威発揚の場所</u> (政権を潤す腐敗の温床という面も)

かくして今年に入ってから、「西側先進国対中ロ連携」という対立の構図が急速に深まっている。プーチン大統領は、ウクライナ大統領選挙(5/25)の直前に上海に飛び、中ロ首脳会談で蜜月ぶりをアピールするなど、「反先進国」の態度をちらつかせている。その後は、G7ブリュッセル会議の直後に「ノルマンディ上陸作戦70周年記念式典」(6/6)に出席し、西側首脳と相次いで会談して微妙な間合いを測っているように見える。

おそらく次の山場は、新興国5か国の首脳が顔を揃える第6回BRICSサミットであろう。議長国はブラジルで、7月15日からフォルタレザで開催されるという。なんと **W杯決勝戦の2日後**である⁴。おそらくブラジル政府としては、「W杯が終わらないことには、何もできない！」のが現実なのであろう。

こんな風に、五輪とW杯という2つのスポーツイベントは、2014年の国際情勢に否応なく影を落としているのである。

●「国家を背負うが、政府は背負わない」

もっともファンの観点からすれば、五輪はともかくW杯だけはこの手の政治問題から自由であってほしいものだと思う。

サッカーは徹頭徹尾グローバルなスポーツである。選手や監督はまったくボーダーレスに活躍している。例えば日本代表チームは、直近の4大会でフランス（トルシエ）－ブラジル（ジーコ）－セルビア（オシム）－日本（岡田）－イタリア（ザッケローニ）という5か国の監督を次々に受け入れている。普段は「国籍」にうるさい国なのに、こういう点について誰も疑問を持たないのが不思議なくらいである。

サッカー界の有力選手たちは、日本代表チームの主力も含めて、ほとんどがその頂点たる欧州リーグでプレーしている。たとえ貧しい国に生まれた少年であっても、サッカー選手として成功を収めれば途方もない富と名声を勝ち得ることができる。そんな人たちが、4年に1度だけ国家を背負ってプレーするのがW杯なのである。

チームの強さは、必ずしも国力に比例しない。現在のFIFAランキングにおいては、1位スペイン、2位ドイツ、3位ブラジル、4位ポルトガル、5位アルゼンチンとなっている。GDPや人口よりも、国民のサッカー熱や伝統の方が重要な要素なのである。

そしてThe Economist誌（次ページ参照）がユーモラスに評しているように、W杯は米・中・印の3大国を制覇できていない。米国はサッカーをプレーするけど視てもらえず、中国とインドは視てくれるけどプレーが貧弱で、ブラジル大会にも参加できない。

仮にどこかの独裁国家が、国威高揚のために国力を傾けてサッカーチームを強化したとして、W杯でブラジルやスペインに打ち勝つチームを作るのは至難の業であろう。五輪大会では、ときどきそうやって金メダルを量産する国が現れる。が、サッカーの世界に促成栽培の必勝法はない。強いて言えば、今の日本がやっているように、全国各地で地道にクラブチームを育てつつ、トップ選手を欧州リーグに送り込むことぐらいしかない。

いわば国家は背負うけれども、政府は背負わないのがW杯である。五輪は仕方ないけれども、せめてW杯は政治的な思惑を抜きにして楽しみたいものである。

⁴ 決勝戦は7月13日にリオデジャネイロで行われる。おそらく習近平国家主席なども観戦するのだろう。日本での放映時間は7月14日（月）午前4時からとなる。

<今週の”The Economist”誌から>

”Beautiful game, dirty business”

「サッカーは麗し、ビジネスは穢し」

Cover story

June 7th 2014

***今週の”The Economist”誌は全力でW杯を取り上げています。カバーストーリーでは FIFA の現体制をバツサリ。ブラッター会長を名指しで批判しています。**

<抄訳>

メッシやロナルドの活躍を見ることは楽しい。が、本誌のような国際主義者にとり、このゲームの値打ちはその広汎さにある。フットボールこそはグローバル化の象徴。今週、ブラジルで始まる W 杯は、世界のほぼ半分近くの人が何らかの形で見ることになる。

残念ながら、大会は黒い霧とともに始まる。英紙は 2022 年大会のカタール開催決定の陰で、裏金が動いていたことを報じている。たぶん氷山の一角であろう。FIFA はまた、2010 年以前の大会で不正行為があったと認めている。が、毎度のことで誰も罪には問われない。

疑問は尽きない。そもそも真夏のアラブで W 杯を開くのが良いと、誰が考えたのか。ラグビーやテニスのようなビデオ判定の導入が遅れているのはなぜか。そしてブラッター会長のような人物が、なぜ 1998 年から居座っていられるのか。これだけ腐敗事件が続けば、普通なら追放されそうなものだ。一連のセクハラ発言でも、マンデラ追悼の黙祷を 11 秒で切り上げたことでも、78 歳の老人は時代遅れである。ところがブラッター会長 5 選を阻止する希望の星は、カタール誘致を手伝ったかつての名選手プラティニなのである。

サッカーファンの多くは、ゲームさえ良ければ運営には無関心である。五輪大会も 2002 年冬季大会で同様な問題に直面したし、F1 の会長はドイツで収賄に問われ、米バスケット界では人種差別発言でオーナーが追放されている。しかし、罪に問われないサッカー界はやはりおかしい。トップの腐敗はピッチにも及ぶ。改革への圧力を受けた FIFA では、外部人材の受け入れも進んでいるが、ブラッター体制のままでは何をかいわんやである。

次に腐敗は、開催国の決定以降も続く。サッカー界幹部に賄賂を配るような体制は、当然国内でも同じことをするだろう。大会が汚職の祭典となってしまうかねない。

さらに機会の逸失もある。サッカーはそれほどグローバルな競技ではなく、米中印の 3 大国を制覇できていない。米国はプレーするけれども視てもらえない。中印は視てくれるけれどもプレーがお粗末で、ブラジル大会にも出られない。これら 3 か国はそれぞれに歴史や文化的背景があって、今はサッカーが足場を固めつつある。米国ではちょうど第 2 世代が育ってきた。だったら、なぜ FIFA は大会をカタールに与えたのか。国内リーグの腐敗や八百長に辟易している中国の若いファンも、これではそっぽを向いてしまうだろう。

ブラッター会長追放だけでは構造的な問題は解決しない。スイスの NPO 法人に過ぎない FIFA には恐れるものがなく、各国のサッカー協会も FIFA 資金に依存している。ライバルも不在で、国際サッカーは独占状態にある。FIFA にはガバナンスが効いていないのだ。

スイス政府は組織の刷新を迫り、さもなくば税制優遇措置を撤回すべきだ。スポンサーも、不正問題や審判の判定直後のビデオ確認導入など、新技術導入でもの申したら良い。

悩ましいのは開催国選定で、どこかの国に固定することが考えられる。それでは開催国が有利になり、時差の問題も発生する。そこでその年の優勝国に、8年後の開催権を与えてはどうか。入札により、権利を他国に高値売却することも可。真剣勝負になるだろう。

残念ながら、サッカーファンはロマンを追う愛国者たちであり、合理的なエコノミストではない。ゆえに本誌提案が受け入れられる確率は、イングランドの優勝以下であろう。開催地のローテーションを決定するのも一案だが、何より FIFA の上層部改革が先決だ。

<From the Editor> いよいよ開幕

今朝は5時前に起きて、本号を書きながらW杯初戦の「ブラジル対クロアチア戦」を見ていました。

前半にオウンゴールでクロアチアが1点先取。そこからのブラジルの反撃は、さすがにすさまじいものでした。ネイマールが2発。最後にオスカルが1点ダメ押し。地元としては、堪えられない逆転勝利であったことでしょう。

さて、問題はこれから先のグループCの戦いであります。コートジボワールとギリシャとコロンビアが対戦相手でありますが、ふと気がつくと以前は当社の駐在員事務所がアビジャンとピレウスとボゴタにはあったはず。それが今では3つとも残っていない。それぞれに「ご難」があった国ばかりで、コートジボワールには内戦があり、ギリシャには債務危機があり、コロンビアには麻薬との戦いがあったという経緯があります。

ところが現在は、3か国ともにそれぞれに復調している。コートジボワールは外資の回帰とともに再生に向かい、ギリシャでは経済が底打ちして財政も黒字となり、コロンビアには欧米企業が拠点を築いている。

考えてみれば、日本もまた震災とデフレからようやく立ち直りつつあるところ。アフリカ、欧州、南米、アジアをそれぞれ代表する「復活組」、というのがグループCの共通点なのかもしれません。

FIFAのランキングを見ると、コロンビア8位、ギリシャ12位、コートジボワール23位と、46位の日本から見れば「格上」ばかり。ここはひとつ、胸を借りるつもりで謙虚に戦わねばなりません。つくづくサッカーに国力は関係ないのであります。

忘れないように、観戦スケジュールをメモしておきましょう。

- 6月15日(日) 午前10:00～ コートジボワール対日本 NHK総合
- 6月20日(金) 午前7:00～ 日本対ギリシャ 日本テレビ系&NHK BS1
- 6月25日(水) 午前5:00～ 日本対コロンビア テレビ朝日系

しばらくは早寝早起きの習慣が続きそうです。6月20日金曜日は、たぶん全国各地で遅刻する社員が多くなることが予想されます。注意しましょう。

* 次号は6月27日（金）にお届けする予定です。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までをお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com